まぼろしの南部馬

藤田博保
絵 西村保史郎

まぼろしの南部馬

藤田博保・作
西村保史郎・絵

913

藤田博保

まぼろしの南部馬

講談社　1978

182p　22cm（児童文学創作シリーズ）

まぼろしの南部馬

昭和53年2月28日　第1刷発行

定価880円

著　者　藤田博保

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112

電話　東京(03) 945-1111（大代表）

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　株式会社　黒岩大光堂

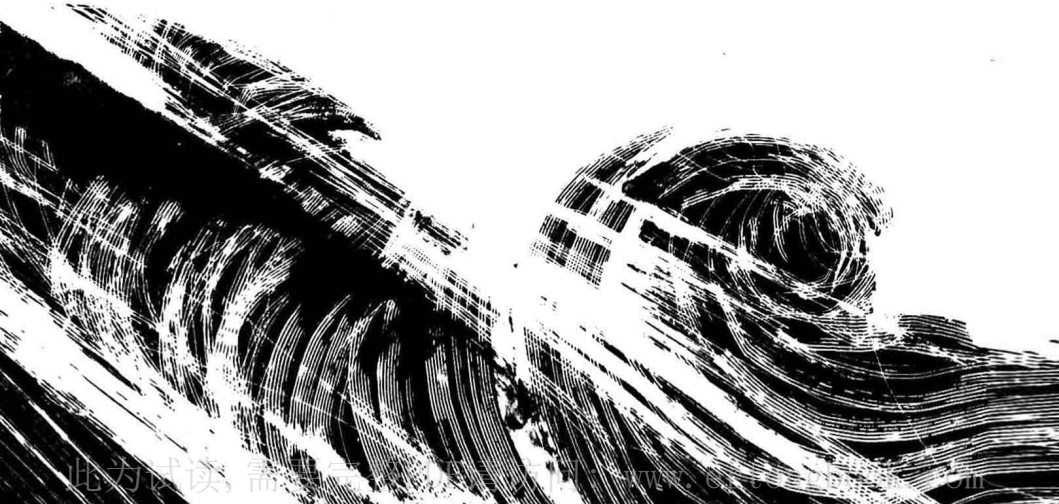
©藤田博保　1978　printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-189747-2253（0）　（児一）

もくじ

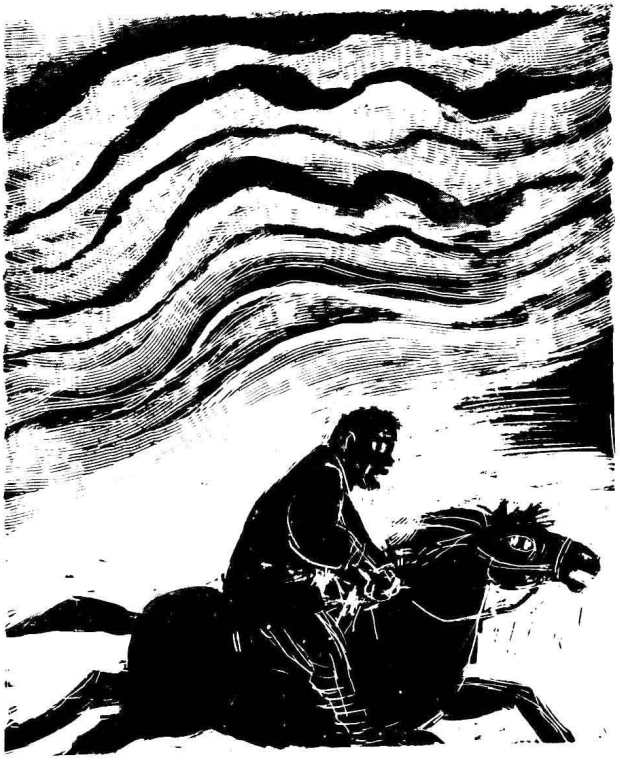
子馬誕生……7
ばくろうのうつりかわり……25
南部馬をもとめて……35
にげだした照月……61
馬力大会……71
照月の負傷……87
太十が照月をつれもどす……113



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ハヤテの調教……123
高梨へいくハヤテ……161

まぼろしの南部馬



昭和三十×年に、青森県下北郡高梨村（仮名）で
純血種に近い南部馬が発見されました……。

子馬誕生

夏の初めの、風のない夜でした。

さく板にかこまれた馬屋の中は、むんむんする熱気がたちこめていました。

馬屋の前につるしたはだか電球のまわりに、やぶかがむらがって、「ブーン」「ブーン」と、せわしく羽音をたてました。

そのとき——馬屋の中では、めす馬（照月）が、お産のための陣痛にくるしんでいたのです。

馬のまわりに四人の男たちが、そのかいぞえにけんめいでした。あるじの与作と、むすこ

の与吉、それにきんじょの茂助と蔵造です。
面づなに両手をかけて、馬の頭を、必死におさえているのは与作でした。
与作のそばで、与吉は、せわしくうちわをうごかしながら、馬につくかを追っています。
茂助と蔵造は、ソネとよぶわらたばで、あせをながしながら、力いっぱい、照月の大きなはらをさすりつづけました。
蔵造は、ふと、ソネの手を休めると、
「これあ、たまらねい暑さだっ――。」
いきなり、シャツをぬぎました。太ってあせかきの蔵造のシャツは、もうびしょぬれでした。
上半身はだかになった蔵造は、すぐまた、ソネをにぎりしめました。
陣痛は、二、三十分おきにやってきました。そのたびに、照月は、せわしく小鼻をふくらませ、うめきたててもがきます。
それは陣痛ばかりでなく、むしぶろのような馬屋の暑さが、照月にはこたえるからでし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

「しんぼうせいや――あとすこしの間だからなあ……。」

与作は、いたわるように馬に声をかけました。

しばらくすると、照月は、きゅうにおとなしくなりました。

しきわらの上に、がっくりと頭をおとして、長々と、あしをなげだし、からだ全体で、あらあらしく、呼吸をつづけました。

はげしい陣痛は、もうおさまったかわりに、こんどは、ぷるぷると、けいれんが起こりました。それが小さな波になって、あしにつたわっていきます。

（これあ――いよいよお産がはじまるぞ……。）男たちは思わず顔を見あわせました。

手を休めながら、みんなの顔にようやく、ほっとしたあんど感がよみがえります。

手を休めると、きゅうにむし暑さがこたえました。

「まったく、息もつまりそうな暑さだじゃ……。」

「ほんとだっ――。」

与作も与吉も、茂助も、シャツをぬいで、流れるあせをぬぐいました。

が、ひょうきんものの茂助がいきなりしゃがむと、そっと照月のはらに耳をおしつけました。

目をつむりながら、しばらく耳をつけていた茂助が、にやっとわらいながら顔をあげ、

「ほっ――これあ、元気のいいマレコ（子馬）だじゃ。早く産まれたがって、はらのなかをかけまわってるぞ……。」

みんなの顔を見まわしながら、首をすくめました。

すると、いちばん年のわかい与吉が、すぐそれをまねました。

が、いつまでも、馬のはらに耳をつけたままで、与吉は、きょとうんとしながら目をむけました。

「聞こえねいなあ。おれには、なにも聞こえねいよ――。」

「聞こえねいって？　マレコが、はらの中をあばれるのが聞こえねいってか……。」

「与吉――おまえ、いつから耳が聞こえなくなったど？」

茂助につづいて、蔵造もいいました。

「はっ、ははは――。」

それを見て、与作もはらをかかえてわらいだしました。みんなで与吉をからかったのです。

どこの村にも、「馬きちがい」はいるものです。茂助も蔵造もそんな連中でした。茂助はトタン屋、蔵造はとうふ屋でしたが、馬のことになるとむちゅうで、もう、しごとも手につかないのです。

きのうの夕方――。

与作が馬屋にいったとき、照月のようすが、いつもとちがっているのに気がつきました。ひどく気がたっていたからでした。

いつもなら馬屋にいくと、だだっ子のように、ひづめを鳴らして、かいばをねだるのに、そのときは見むきもしません。

「どうしたど――？　きょうは、とくべつに、ごちそうをいっぱいもってきたのに……。」

きざんだ青草に、米ぬかをまぜた、好物のかいばをあたえても、照月は、けいかいするように耳をふせて、はげしく首をふりました。

そして、しきりに、からだをさく板にこすりつけます。
与作には、すぐ、それがわかりました。
それは、出産の前にみせる、馬のかわったしぐさだからでした。
照月の出産の予定は、まだ十日もあとでした。
それだけに与作もびっくりしました。
「おうーい、照月は、もう産気づいたじゃ……。」
与作は、すぐ家族に知らせました。

子馬が産まれる――。
きゅうに、家の中があわただしくなりました。与作は、さっそく馬屋のすすをはらって、新しいしめなわをはり、馬頭観音（馬の神さま）に燈明と、おみきもそなえました。
茂助と蔵造にも知らせました。照月の出産を、二人とも待ちわびていたからです。茂助も蔵造も、すぐやってきました。
与吉は、かけつけた茂助や蔵造たちと、馬屋のよごれたしきわらを、新しいものととり

かえてやりました。

だいどころでは、与作のおかみ（おくさん）と、与吉のよめが、かまどに火をたいて湯をわかしました。

照月が、出産をおえたのは明け方近くでした。

「産まれたっ――。」

「マレコが、産まれたぞっ――。」

夜どおし、暑くるしい空気につつまれた馬屋のなかから、どっと男たちの歓声がわきあがりました。

それを聞いて、おかみもよめも、だいどころから、かけてきました。

お産をぶじはたした照月は、すっかりつかれきっていました。

でも、照月は、自分の胎内から産まれた子馬のにおいをかぎながら、母馬の本能で立ちあがろうとしました。

しかし、照月は、前あしを負傷していたのです。でも、このときは、それをすっかり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com